

## 校外研修（Off-JT）とOJTの一層の充実を目指して

—「学び続ける教職員のための資料」の活用を通して—

カリキュラムセンター指導主事研究会議

野呂 公人	齋藤 靖広	松浦 信明	堀江 賢司	新田 瑞江	山城 祥二
伊藤 由佳子	長澤 秀行	岡田 智弘	川城 晴奈	門口 知弘	大崎 英樹
大窪 洋次郎	神生 留佳	青木 洋俊	武内 洋平	渡部 真代	

### I 主題設定の理由

教育基本法第9条、教育公務員特例法第21条等に示される通り、教師はそもそも学び続ける存在であることが強く期待されている。令和4年12月19日の中央教育審議会答申には、「個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。つまり、教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形であるといえる。」<sup>1</sup>「主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。

『令和の日本型学校教育』を実現するためには、子供たちの学びの転換とともに、教師自身の学び（研修観）の転換を図る必要がある。」<sup>2</sup>と示されている。こうした背景から、「教職員に求められる要請を踏まえつつ、学び手たる教職員を『主語』とした研修に、研修の在り方を変えていく」<sup>3</sup>ことが求められているといえる。

これまで、カリキュラムセンターでは、平成30年・令和元年度に指導主事研究として「～学び合う先生、育ちゆく学校～教師力を高めるガイドブック（平成31年3月）」を作成し、同ガイドブックの活用を通して各学校での意図的・計画的なOJTの推進を支援するとともに、OJTとのつながりを意識した校外研修（Off-JT）の構築を図ってきた。そのような中、令和6年度に教職員がより主体的に学ぶことができる資料として、特に本市立学校教職員に必要な情報について参考となる資料やWebサイトをまとめた「学び続ける教職員のための資料」の作成に取り組み、令和7年5月に全教職員の端末から閲覧できるデータにて提供したところである。

「研修観の転換」が求められる中、教職員が「主語」となるよう校外研修（Off-JT）やOJTの在り方を改善していくことは、自ら主体的に学び続ける教職員の育成に寄与するとともに、校外研修（Off-JT）を担当する指導主事の指導力向上にも資するものである。そこで、研究主題を次のように設定し、研究を進めることとした。

校外研修（Off-JT）とOJTの一層の充実を目指して  
—「学び続ける教職員のための資料」の活用を通して—

<sup>1</sup> 『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）中央教育審議会 令和4年12月19日 p.22

<sup>2</sup> 同上 p.23

<sup>3</sup> 『研修観の転換』に向けたNITSからの提案（第1次）～豊かな気付きの醸成～ 独立行政法人教職員支援機構 2024年 p.1

## II 研究の内容

### 1 本研究の方向性

これまでの研究成果や、「研修観の転換」が求められる時代背景等を踏まえ、本研究では「教職員が『主語』となり、自ら主体的に学び続ける姿」を目指し、その実現のために、令和6年度に作成（令和7年5月に発出）した「学び続ける教職員のための資料」の活用を通し、校外研修（Off-JT）とOJTの一層の充実を図っていくことをねらいとした。このねらいに向け、「学び続ける教職員のための資料」の校内での活用について様々な研修や学校訪問の場などを通して周知しつつ、ライフステージに応じた研修をはじめとした校外研修（Off-JT）やOJTにおいて、同資料を活用し、教職員が「主語」となるような手立てを工夫する。また、同資料についても、データ提供の利点を生かし、教職員のニーズや実態を踏まえたうえで内容の改善を図る。

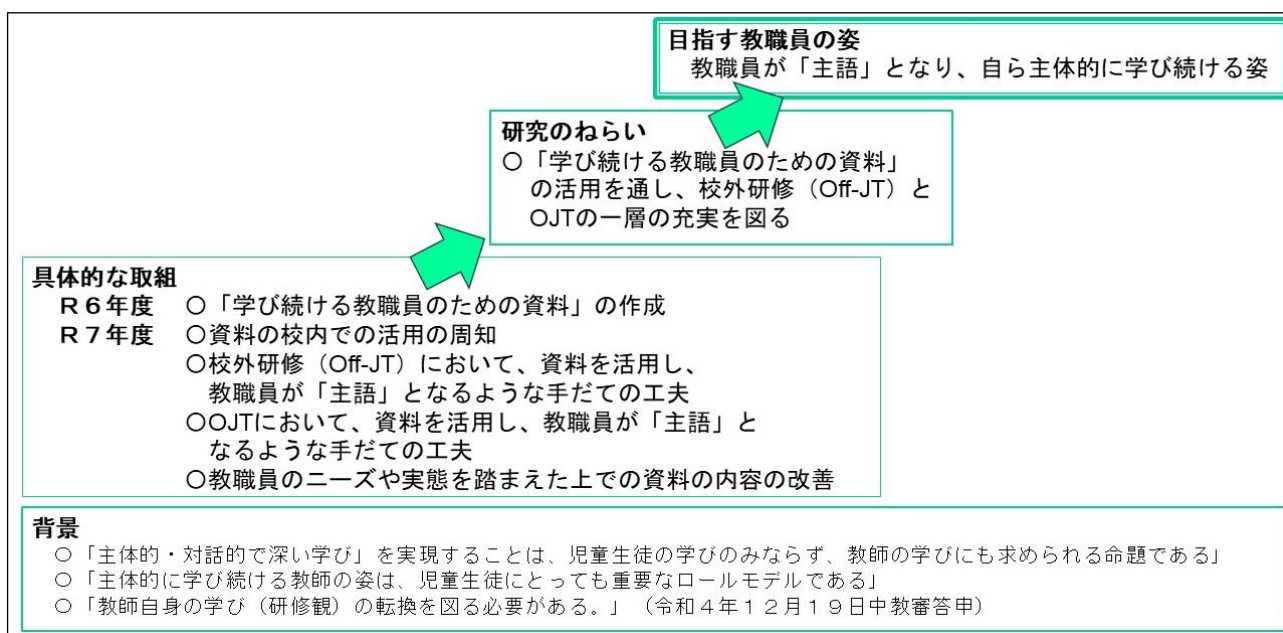


図1 本研究の方向性について

### 2 具体的な取組

#### (1)「学び続ける教職員のための資料」の作成

##### ①資料作成の背景

これまで本市では、川崎市の教員として必要とされる基本的な内容についてまとめたものとして、冊子「はじめて教員になった人のために」を作成し、校外研修（Off-JT）やOJTで活用できるようにしてきた。しかしながら、本冊子は初任者研修（新規採用教職員研修）の受講者を対象に配付したものであり、全教職員がいつでも参照できる資料とはなっていなかった。また、内容については、毎年度見直しをして更新していたものの、様々な教育課題の広がりに伴い、項目が増えて100ページを超えるものとなり、手軽に活用できる資料とは言い難いものになりつつあった。

そこで、「初任者に限らず、全教職員が手軽に活用できる資料」となる新資料の作成について、令和6年度のカリキュラムセンター指導主事研究で取り組むこととなった。



図2 冊子「はじめて教員になった人のために」（令和6年度版）

## ②資料作成の過程

カリキュラムセンター指導主事研究では、月1回カリキュラムセンター内の全指導主事が集まり、研究の経過を共有し協議を通して研究を進めていく場（研究日）を設けている。令和6年度第1回の研究日（令和6年6月6日）では、資料の方向性として次の3点をメンバー内で共有した。

- ・ 初任者に限らず、川崎市立学校の全ての教職員を対象とする
- ・ 内容については全てを網羅するのではなく、項目を厳選し、あくまで概要を示すものとする
- ・ データ提供の利点を生かし、詳細をリンクで示せるようにする

これらの方向性を踏まえ、資料で目指すものについて協議を重ねる中で、イメージを具体化させ、共通理解につなげていった。令和6年度第4回の研究日（令和6年10月17日）では、「はじめて教員になった人のために」に掲載している項目をもとに、Google スプレッドシートを用いて意見を集約しながら資料に入れる内容の厳選を図った。

資料については、データ提供の利便性をより生かせるよう、Google スライドの形式で本市立学校全教職員が閲覧できるようにした。スライド形式としたことから、記載内容も精選し、直感的に概要をつかめるように工夫した。また、段階的により詳しい内容が確認できるよう、項目によっては関連する外部リンクを掲載し、更に詳しい内容の情報を得やすいようにした（図3）。カリキュラムセンターが所管しない内容についての記載は、それぞれ担当する課・室にスライドの作成を依頼した。

資料の名称は、全ての教師が学び続ける存在であることを期待されていることを踏まえ、「学び続ける教職員のための資料」とした。

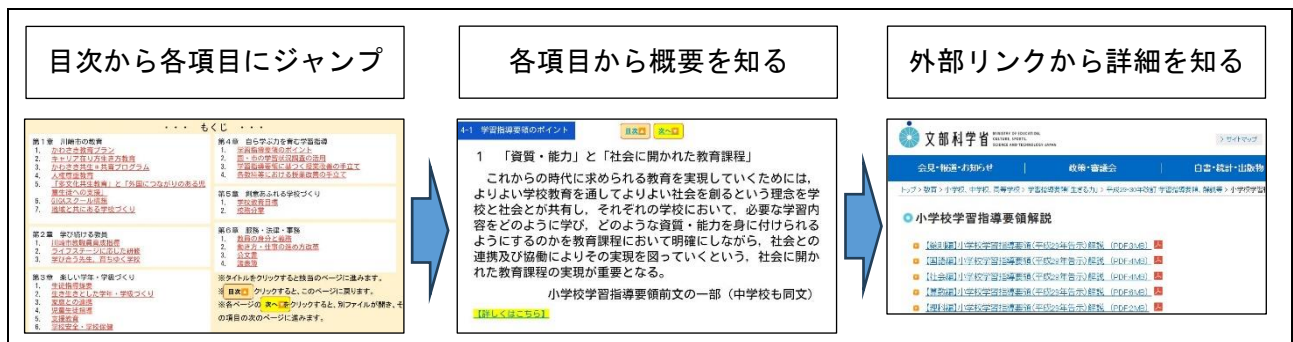


図3 「学び続ける教職員のための資料」の構成

### (2) 「学び続ける教職員のための資料」の活用の周知

令和6年度に作成に取り組んだ「学び続ける教職員のための資料」は、その後の校正等を経て、令和7年5月9日付の7川教総セ第484号「令和7年度『学び続ける教職員のための資料』について(依頼)」にて全市立学校へ文書発出するとともに、研修等で周知を図り、活用について啓発を行った。

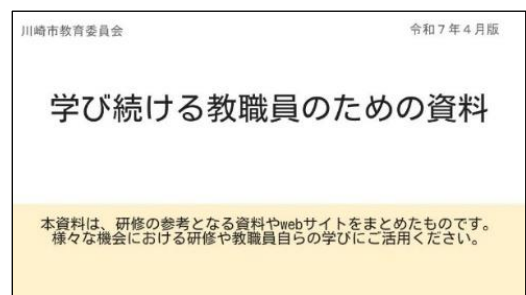


図4 「学び続ける教職員のための資料」表紙

### ①校外研修（Off-JT）における活用周知

各ライフステージに応じた研修では、令和4年度にカリキュラムセンターで作成した「各ライフステージに応じた研修のつながり一覧表」の通り、校内での各研修の受講者同士を意図的・計画的に結び付け、OJTの活性化につなげる取組を進めている。OJTのテーマの例としては、学習指導、児童生徒指導、人権尊重・多文化共生教育等があり、これらについて「学び続ける教職員のための資料」から情報を得ることができるようになっている。

そこで、各研修の初回のガイダンスの時間等を用いて、「学び続ける教職員のための資料」について改めて案内し、実際に端末を操作して資料を閲覧する時間を設けて活用を周知した。併せて各研修の Google クラブルームに説明資料を掲載した。

## ② 「学び続ける教職員のための資料」の閲覧状況

Google スライドで作成したデータは、「アクティビティダッシュボード」の機能により、毎日の閲覧者数等を確認することができる。

令和7年5月9日の公開日以降、令和7年12月31日までの閲覧者数は延べ8,337名となっている。

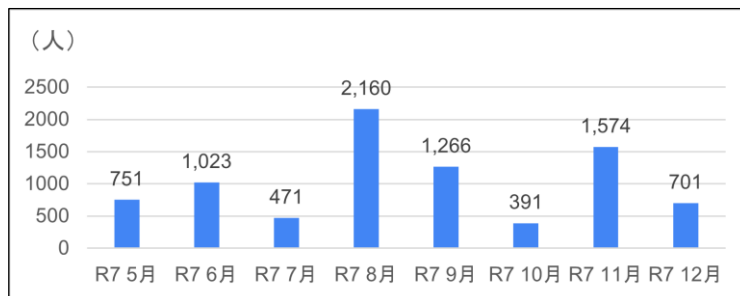


図5 「学び続ける教職員のための資料」の閲覧者数

### (3) 校外研修 (Off-JT) における活用

#### ① 中堅教諭等資質向上研修「授業研究①」

中堅教諭等資質向上研修では、「授業研究」として受講者が設定したテーマに基づいて校内で実践を行うとともに、その成果と課題をレポートにまとめて校外研修 (Off-JT) の場で共有し、グループ協議で様々な意見を交換しながらその後の各自の授業改善につなげるようにしている。

令和7年8月4日に行われた「授業研究①」では、学習指導要領のポイントやOJTの必要性等について再確認できるよう「学び続ける教職員のための資料」を改めて受講者に紹介した上でグループ協議を実施した。

受講者の振り返りの一部を紹介する。

#### (小学校教員)

- ・ステージⅠ教員との授業検討の際に「学び続ける教職員のための資料」を使ってアドバイスができそうだった。
- ・自分も困った際にこの資料を使用し、ステージⅠの教員と一緒に確認の際に使うなどして活用したい。
- ・この資料を活用しながら自身も学び続け、的確な助言ができるようになっていきたい。
- ・この資料を通し自分の悩みも解決できそうなので、こまめに確認していきたい。
- ・この資料をOJTで使い、ステージⅠの先生とも同じ指標で指導していきたい。
- ・ステージⅠの教員からすると、指導主事とステージⅡの教員で言っていることが違うと混乱してしまうことが分かった。経験則だけで話すのではなく、「学び続ける教職員のための資料」を基に話せたらよいと思った。

#### (中学校教員)

- ・私はメンティーと教科が違うので、資料の「4-4 各教科等における授業改善の手立て」の部分を利用し、根拠をもった説得力のある声掛け、または話し合いをしていきたい。
- ・この資料を活用して校内OJTを実施できると感じた。「各教科における授業改善の手立て」のページを使って、教科や領域が異なる内容についても資料を用いて話し合いができると思った。
- ・「学び続ける教職員のための資料」から、他教科の観点なども読み解いていってみたい。
- ・この資料を見て、初任から今までの中で学習指導要領が変わっていることから、授業内容で抜け落ちがちとなる部分があると分かったので、そこに関しても意識していきたい。
- ・授業研究において、自信がないときに確認するのにとてもよいと思った。分かりやすくまとまっていたので、今後も活用していきたい。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の各教科等における具体的な授業改善の視点を、メンティーの先生と一緒に見て確認しながらOJTを進められる。根拠を持ち、より分かりやすく、メンティーも見直す事ができるので、振り返りの際に活用していきたい。
- ・令和3年答申「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を実践するために、学び続けていく必要がある。その根拠として総則を振り返ったり、その他の資料を「学び続ける教職員のための資料」で確認したりすることが大切であると感じた。

記述からは、資料を通して明確な根拠をもってOJTに臨もうとする姿勢がうかがえる。中堅教諭等資質向上研修の受講者は教員経験が10年程度の者を対象にしている。それだけに、時として経験則に頼りがちになる傾向も見られるが、資料を通して改めて根拠の大切さに気づき、自信をもってメンティーであるステージI教員とのOJTを進めていこうとするきっかけとなっていることが分かる。

## ②初任者宿泊研修の代替研修

初任者研修（新規採用教職員研修）の宿泊研修の欠席者の代替研修として、「学び続ける教職員のための資料」の第3章「楽しい学年・学級づくり」、第4章「自ら学ぶ力を育む学習指導」の内容を踏まえ、児童生徒指導・学級経営と学習指導についてこれまでの自身の取組を分析し、成果と課題、改善の手立て等を考え、研修ノートの「校外研修の記録」にまとめる研修を例として示した。

「学び続ける教職員のための資料」を活用して代替研修に取り組んだ受講者の振り返りの一部を紹介する。

- ・これまで解決にいたらなかった事案についても、資料にある考えを知っていたら他の対応方法ができていたかもしれないということに気付くことができた。常に自身も学び続けながら、日々生徒と向き合う中で生じる課題の解決のヒントとして生かしていきたいと思う。
- ・資料が専用サイトにあることが分かり、資料をきっかけに学年の先生方や先輩の先生方に話を聞いてアドバイスを聞くことができたということ自体が、今後教育活動を行ううえで、一人で抱え込むことなく乗り越えていける勇気を得ることができたように思う。
- ・「学び続ける教職員のための資料」を読んで、7月までの学級経営を振り返ると、できている点もあればまだまだ改善しなければならない点が多くあることを知った。特に、生き生きとした学級の集団をつくるには、児童生徒一人一人のよさや可能性を生かすと同時に、他者の失敗や短所に寛容で共感的な学級の雰囲気醸成することが大切と学んだ。
- ・今後に向けて、今回資料を見て新しく知った内容を実践していきたいと思う。実践で終わらず、また自分のことを振り返ることで、どんどん成長していきたい。

記述からは、初任者が自ら主体的に資料を活用し、目の前の課題に向き合いながら今後の実践に取り組んでいこうとする姿がうかがえる。特に初任者にとっては、正しい根拠となる資料が身近にあることの意義は大きいと考えられる。

## （4）OJTにおける活用

市内の4小中学校に依頼し、「学び続ける教職員のための資料」を積極的に活用してOJTを推進している事例を調査した。令和7年10月から12月にかけて、指導主事がOJTの実践を観察し、関係職員への聞き取りを行った。

### ①A小学校：児童主体の学級会を目指した初任者とのOJT

A小学校では、初任者と指導教諭によるOJTを観察した。後期の学級づくりに向けて、「学び続ける教職員のための資料」を活用し、当番活動と係活動のねらいの違いを再確認したうえで、初任者が児童主体の学級会を運営できるよう、指導教諭が助言する様子が見られた。

資料について、初任者からは「調べたいときにGIGA端末からすぐ確認できる手放せないアイテムとなっている」、指導教諭からは「自分がこれまでやってきたことが書いてあるから間違っていないかったという根拠の裏付けにつながる」という声があった。



図6 A小学校のOJTの様子

## ②B中学校：道徳の授業改善に向けた中堅教諭と2年目教諭によるOJT

B中学校では、中堅教諭等資質向上研修受講者と2年目教員研修受講者によるOJTを観察した。実践した道徳の授業について、「学び続ける教職員のための資料」を参照し、道徳科のねらいや「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた具体的な授業改善の視点を確認しながら、それぞれの授業実践を振り返る様子が見られた。

資料について、中堅教諭からは「大事な点をすぐに確認できたり、その基となる資料に手軽に飛んで調べたりできるのがありがたい」「4月の時点で全教員が知っておいたほうが良い資料だ」、2年目教諭からは「OJTをやることによって、授業に対して前向きな気持ちになっているのが大きな成果と感じる」という声があった。



図7 B中学校のOJTの様子

## ③C小学校：中堅教諭による特別活動の研究授業後の初任者・2年目教諭とのOJT

C小学校では、特別活動の研究授業を担当した中堅教諭と、その授業を参観した初任者および2年目教諭の3名によるOJTの様子を観察した。研究授業として実施された学級会に至るまで、どのような学級づくりが重要であるかについて、中堅教諭が「学び続ける教職員のための資料」を提示しながら助言する場面が見られた。

中堅教諭は説明の際、自作スライドに「学び続ける教職員のための資料」の関係ページを組み込み、自身の取組の理論的根拠として活用していた。また、校内の専用サイトに同資料へのリンクを掲載し、校内全体への周知を図っていた。



図8 C小学校のOJTの様子

## ④D中学校：中堅教諭と臨時的任用教員による理科授業についてのOJT

D中学校では、中堅教諭等資質向上研修受講者と臨時的任用教員による理科授業についてのOJTを観察した。臨時的任用教員が実施した授業を振り返り、実験の安全管理や生徒への提示方法について、「学び続ける教職員のための資料」を活用しながら、授業における「場づくり」の重要性を助言する場面が見られた。

資料について、中堅教諭からは「自分が経験で感じていたことを根拠として補強してくれる存在」、臨時的任用教員からは「情報が可視化され、納得につながる」という声があった。



図9 D中学校のOJTの様子

### (5) 活用状況アンケートの実施

「学び続ける教職員のための資料」の活用推進・改善につなげるため、令和7年11月に本市立学校全教職員を対象にアンケートを実施した。回答者の内訳は表1<sup>4)</sup>に示す通りである。

表1 活用状況アンケート回答者内訳

単位：人

	ステージⅠ	ステージⅡ	ステージⅢ	その他	計
小学校	198	281	196	27	702
中学校	71	95	90	23	279
高等学校	10	9	11	1	31
特別支援学校	26	16	13	6	61
計	305	401	310	57	1,073

<sup>4)</sup> 表中にあるステージとは、ステージⅠは「主に、採用1校目終了時までの教員」、ステージⅡは「主に、2校目異動から20年経験程度の教員」、ステージⅢは「20年程度以上の教員、総括教諭及び教頭、副校長」を指す。

本資料の認知度と使用回数については、図 10 に示す通りである。回答者のうち 27%が「資料について知らなかった」、37%が「資料は知っていたが、使用していない」と回答しており、実際に本資料を使用したことがある回答者の割合は 4 割弱にとどまった。

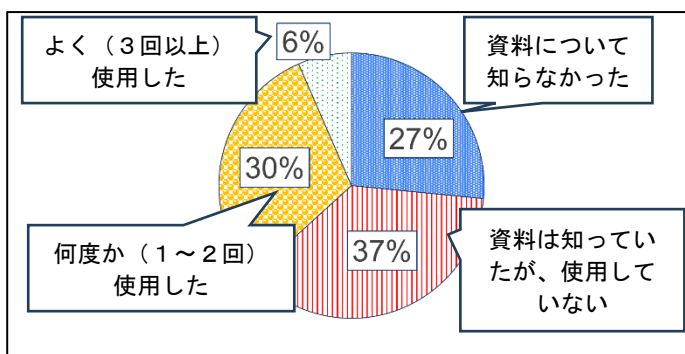


図 10 本資料の認知度と使用回数

本資料を活用した成果については、図 11 に示す通りである。「既知の情報について改めて確認ができた」と回答した割合が 64%と最も高く、次いで「自身にとって新たな情報を得ることができた」が 57%、「自身の考えや行動を裏付ける根拠となった」が 37%であった。

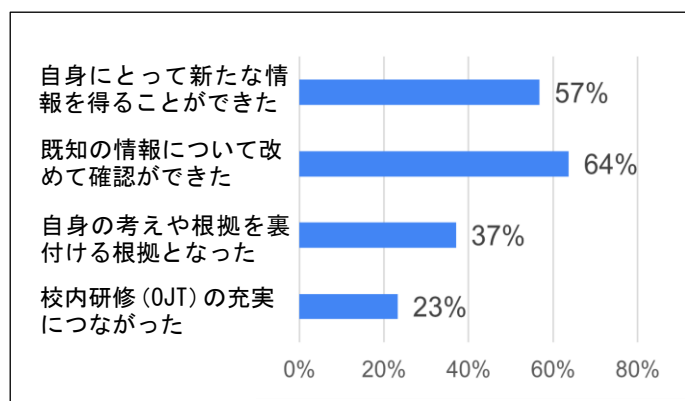


図 11 本資料の活用成果（複数選択可）

今後本資料を活用していきたい場面や状況と、本資料を更によりよいものにしていくための改善案についての主な意見は、表 2 にまとめた。

表 2 本資料を活用していきたい場面や状況・更によりよいものにしていくための改善案についての主な意見

本資料を、今後どのような場面や状況で使用していきたいと思いませんか。		
主な意見	OJT や自己研鑽	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内での OJT や、研修を計画する際の資料として活用したい</li> <li>・自己研鑽、スキルアップ、教員としての在り方や能力の確認に生かしたい</li> <li>・長期休暇中（夏季・冬季）や業務が落ち着いたときに利用したい</li> </ul>
	授業改善や学級経営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の授業づくり、授業改善、教材研究、指導案作成の参考にしたい</li> <li>・学級経営、クラスづくりの指針として活用したい</li> <li>・保護者の方への説明、懇談会・個人面談、家庭との連携の際に見直したい</li> </ul>
	根拠資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・確認したいことや知りたいことがあったときに情報収集や調査に使用したい</li> <li>・最新の動向や時代のニーズに対応するための学習・確認に使用したい</li> <li>・判断に迷ったときや、自身の行動の根拠・裏付けを確認したいときに使用したい</li> <li>・校務分掌や業務を進める際や、諸表簿・公文書の処理等に活用したい</li> </ul>
本資料を、更によりよいものとしていくための改善案などがありましたらご記入ください。		
主な意見	内容の具体化と情報の精選	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ごもっとも」のことが並んでいるがなかなか心に響いてこないため、具体例がほしい</li> <li>・簡潔にまとまっているが、時にはもっと詳しく知りたい、参照したいという場合もある</li> <li>・情報量が多すぎて読むのに時間がかかるため、コンパクトにまとめてほしい</li> <li>・文章が多いので、箇条書きや図表での表記が分かりやすい</li> </ul>
	アクセス性の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関連するより多くの資料をリンク先として登録して欲しい</li> <li>・スライド形式ではなく、Google サイトでまとめるといいのではない</li> <li>・GIGA 端末のブックマークに入っているとよい</li> </ul>
	周知の徹底	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内での職員への周知が足りていないので、しっかりと周知させていくことが必要</li> <li>・研修などで使う機会を増やして認知度や必要性をアップさせる</li> <li>・G4th のメールで全教職員へ通知すると目につきやすい</li> </ul>

## （6）資料の改善

### ①内容面の見直し

内容面については、「より詳しく具体的に示してほしい」「情報を精選し簡潔に示してほしい」との両面の意見が寄せられた。本資料では、各項目の概要を簡潔に示し、詳細情報はリンク先で提示する構成とすることで、双方の要望に対応した改善を図った。

## ②アクセス性の向上

全体を俯瞰しながら必要な資料に容易にアクセスできるようにするために、Google スライド形式から Google サイト形式へ変更した。また、市内全教職員の GIGA 端末のブックマークに登録されている「総合教育センター」のサイトのトップページに資料へのリンクを貼り、より手軽に閲覧できる環境を整備した。

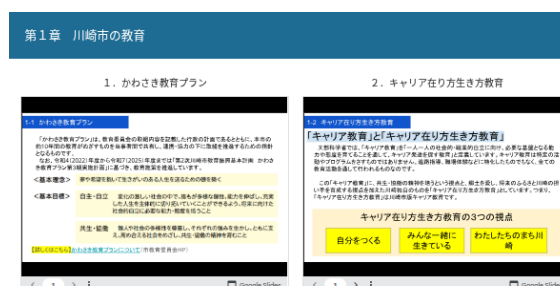


図 12 Google サイト形式の資料

## Ⅲ 研究のまとめ

本研究は、令和 6・7 年度の 2 年間にわたり、カリキュラムセンター指導主事研究として実施した。令和 6 年度は主に資料の作成に取り組み、令和 7 年度は資料を公開し、活用を促進するとともに、さらなる改善に向けた検討を行った。

本研究が目指したものは、教職員が「主語」となり主体的に学び続ける姿である。検証した校外研修 (Off-JT) や OJT では、本資料を活用し、教職員が自ら学び続けようとする姿を随所で確認でき、一定の成果が得られたと考えられる。

一方、課題として、本資料の活用が十分に進んでいない点が挙げられる。活用状況アンケートでは、本資料を実際に使用した割合は 4 割弱にとどまり、自由記述でも周知徹底の必要性に関する意見が多く寄せられた。今後、活用をさらに進めるためには、資料の周知強化に加え、内容の充実と継続的な更新が不可欠である。当センターで実施している各ライフステージに応じた研修等でも本資料を積極的に取り入れ、研修の質の向上につなげていきたい。教職員が実際に資料を使用することで有用性を実感し、常に手元で活用できる存在として定着することが、活用促進につながると考えられる。

「研修観の転換」が求められる中、校外研修 (Off-JT) や OJT の在り方について、研修を実施する担当者が「主語」となるのではなく、研修を受ける教職員が「主語」となることが大切である。研修を「何かを教えてもらう」という受動的な機会としてのみ捉えるのではなく、研修で得た知見を自らの課題と照らし合わせ、試行錯誤を繰り返しながら実践に生かすという能動的な学びが求められている。

このような主体的な学びを促進するためには、教職員が自分事として学び続ける姿勢を支援する仕組みが欠かせない。その一助として、本資料「学び続ける教職員のための資料」を活用し、校外研修 (Off-JT) を一層充実させ、OJT を支援する取組を今後も推進していきたい。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援ご助言くださいました皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。